

企画・セッション

その他企画・各種会議

1. 多職種参加型フォーラム
「医療を取り巻く環境・複雑化する社会課題」
～つながりが薄れた社会で、命の選択を誰が支えるのか。
多職種はどう応えるか。～
10月22日(木) 10:00～11:30 第4会場(福岡国際会議場 4F 411)
2. 整形外科部長会クローズドセッション
10月22日(木) 10:00～11:30 第10会場(福岡国際会議場 4F 401)
3. 退院後を見据えた病院薬剤師の新たな業務展開
～病棟薬剤業務実施加算の引き上げが示唆する病院薬剤師の
未来像～
10月22日(木) 10:00～12:00 第13会場(福岡国際会議場 2F 201)
4. リハビリテーションDXの実装戦略
～成功事例から学ぶ現場定着と横展開～
10月22日(木) 10:00～11:00 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)
5. 日本赤十字社 診療放射線技師会・臨床検査技師会 合同シンポジウム
「見たい！聞きたい!!話したい!!! Part.2」
放科と検査における緊急情報伝達(STAT画像・パニック値)
－ うまくいく理由とうまくいかない課題・問題点 －
10月22日(木) 10:00～11:30 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)
6. 九州発の医療・防災イノベーション
～日本における医療・防災課題の共通解～
10月22日(木) 10:00～11:30 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)

-
7. 整形外科部長会オープンセッション
10月22日(木) 13:30～15:00 第10会場(福岡国際会議場 4F 401)
 8. 外国人診療 いまやること、これからやること 6
10月22日(木) 13:30～15:30 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)
 9. 臨床工学シンポジウムⅠ
つながる安全対策～想定外の出来事共有シンポジウム Part 8～
10月22日(木) 13:30～15:30 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)
 10. 2026年 全国赤十字病院救急医療実務者会議
10月22日(木) 13:30～15:30 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)
 11. 日赤医療経営士会 参加型企画
「もしあなたが院長になったら？
ーその課題、多職種で解決します！ー Part 2」
10月22日(木) 15:40～17:10 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)
 12. みんなで語ろう。未来の赤十字国際活動。
10月22日(木) 16:50～17:50 第13会場(福岡国際会議場 2F 201)
 13. 第16回JRC産婦人科連絡協議会
10月22日(木) 17:00～18:00 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)
 14. 日本赤十字社臨床工学技士会理事会
10月23日(金) 8:50～9:50 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)
 15. 日赤医療経営士会 将来構想会議
10月23日(金) 8:50～9:50 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)
 16. 赤十字中小病院長会企画
中小規模医療施設の持続可能性を考える
ー経営・人材・質向上への挑戦
10月23日(金) 8:50～10:50 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)
 17. 臨床工学シンポジウムⅡ
『つながる臨床工学技士たち～交流型業務研修報告会～』
10月23日(金) 10:15～11:15 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)
 18. 医療現場でのAI活用 ～現在・未来～
医療ITベンダーから見た全国赤十字病院での実装最前線
10月23日(金) 10:30～12:00 第11会場(福岡国際会議場 4F 402+403)
 19. 国際人道法普及ツール レイドクロスの基礎を学ぼう
10月23日(金) 13:30～14:40 第10会場(福岡国際会議場 4F 401)

企画・セッション その他企画・各種会議 1

10月22日(木) 10:00～11:30 第4会場(福岡国際会議場 4F 411)

主催 全国赤十字医療ソーシャルワーカー協議会

多職種参加型フォーラム

「医療を取り巻く環境・複雑化する社会課題」 ～つながりが薄れた社会で、命の選択を誰が支えるのか。 多職種はどう応えるか。～

企画・セッション
その他企画・各種会議

少子高齢化の進行、単身世帯の増加、経済的困窮、外国籍住民への対応、精神・認知症疾患を抱える患者の増加など、医療を取り巻く環境は急速に変化し、医療機関が対峙する社会課題はかつてないほど複雑・多様化している。加えて、加齢に伴う身体的・認知的機能の低下、いわゆるフレイルの進行した患者への支援においては、本人の意思表示が困難となる場面が増加しており、医療・介護の現場における対応はより一層の専門性と慎重さを求められている。

とりわけ、頼れる身寄りのない人(頼れる家族・親族・知人がいない方)への支援は、現場における喫緊の課題である。アドバンス・ケア・プランニング(ACP)の実践においては、本人が意思表示できる段階での対話・記録にとどまらず、意思決定能力が低下した後の「ACP第二段階」として、本人の価値観や生き方に基づく意思をいかに尊重し、医療・ケアの方針決定に反映させるかが問われている。「本人にとっての最善とは何か」を多職種が共に考え、倫理的課題に誠実に向き合う姿勢が、今まさに求められている。

こうした課題に対応するためには、突然の病状変化や判断能力の低下が生じてからではなく、日頃の備えとして、本人・家族・支援者が平時から継続的な対話を積み重ねることが不可欠である。地域包括ケアシステムや重層的支援体制整備の枠組みを活用しながら、医療機関・福祉機関・行政・地域が有機的に連携し、個人の尊厳と権利を守る仕組みを社会全体で構築していくことが求められる。

このような状況の中で、医療ソーシャルワーカーはいかなる専門性を発揮し、どのような役割を担うべきか。また、医師・看護師・介護職・行政・地域支援者など多職種・多機関との連携・協働を通じて、複雑化する社会課題にどう立ち向かうべきか。本フォーラムでは、医療職・福祉職等さまざまな立場の参加者を交え、具体的な実践事例や取り組みを共有しながら、多角的な視点で討論する。一人ひとりの権利擁護と意思決定支援の実現に向け、専門職として何ができるかを、参加者とともに深く探求していきたい。

○座 長：榎本 伸一 SW(愛知医療センター名古屋第一病院)

全国赤十字医療ソーシャルワーカー協議会 会長)

○司 会：鈴木 志奈 SW(小川赤十字病院)

全国赤十字医療ソーシャルワーカー協議会 副会長)

○発表者：吉野 雅人 SW(熊本赤十字病院 入退院支援課長 社会福祉士・精神保健福祉士)

小出 良子 Ns.(大分赤十字病院 地域医療連携課 がん性疼痛看護認定看護師)

相澤 翔 CM(釧路赤十字病院 居宅介護支援係長 ケアマネジャー)

熊本赤十字病院 入退院支援課

熊本赤十字病院における頼れる身寄りがいない患者支援の現状と課題について

吉野 雅人(社会福祉士・精神保健福祉士)

【背景】当院PFMセンター(医療連携室)では、転院調整業務、退院支援業務、相談支援業務、病床管理業務、入院説明業務、保護事業対応や苦情対応など多岐にわたる業務を担っている。近年は患者の生活背景が複雑化しており、特に頼れる身寄りがいない患者への支援が喫緊の課題となっている。

【目的】頼れる身寄りがいない患者では、金銭管理、意思決定、医療同意、死後対応などが共通の課題である。既存の制度や社会資源のみでは課題の即時性に対応できないことも多く、支援が停滞する場合がある。受診から入院、退院までの各フェーズにおける課題を整理し、各機関がどのように役割分担できるかを検討する。

【方法】連携室の看護師およびソーシャルワーカーが電子カルテに記録する支援内容について入力項目を見直した。改訂後約1年間に蓄積された記録データから生活背景に関する情報を抽出し、頼れる身寄りがいない患者に共通する課題について分析を行った。

【結果】連携室で支援した患者全体のうち、頼れる身寄りがいない患者は53名(1.4%)であった。支援内容は退院支援18.6%、経済的問題15.7%、制度活用10%、死後対応10%、身元保証・権利擁護9%の順に多かった。特に金銭的問題や意思決定支援が共通課題であり、地域のケアマネジャーや民生委員など関係者の支援によって支えられている実態も認められた。

【考察】単身高齢者や家族の支援が期待できない高齢者が増加する中、医療機関や施設のみで対応することには限界がある。地域の関係機関との連携を強化し、それぞれの役割を明確にしながら継続的な支援体制を構築する必要がある。

大分赤十字病院 地域医療連携課

身寄りのない終末期がん患者の希望を支える看護～退院支援看護師の関わりから～

小出 良子(がん性疼痛看護認定看護師)

【背景】昨今、病状の進行を抑える目的で死亡の数ヶ月前まで化学療法が行われている状況がある。そのため、ACPに取り組みず病状進行で入院となる事例にも遭遇する。今回、治療継続を希望する身寄りのない終末期がん患者の意思決定を支える看護を経験したため報告する。

【事例概要と実践】A氏70代女性、独居。切除不能すい臓がん。足のしびれを認めるが「少しでも甘えたらダメになる」と社会資源は利用せずにいた。化学療法を続け長く生きたいと願うA氏は、すぐに人生の最期について考える事は難しかった。誰にも迷惑はかけたくないという気持ちに配慮し、体調が安定している頃は自宅での様子を確認し、時期を見極めて、治療や病状変化に伴う不安や今後への気がかりを傾聴した。その情報は多職種で共有し、A氏が最期の時間を過ごす為の支援について繰り返し検討した。

【結果】A氏は少しずつ人生の最期に向け自ら備える事ができた。ケアマネジャーや友人の支援を受け入れ、大切な猫達の行き先も決めた。最後の入院時は、数十年ぶりに義弟へ連絡をとり現金や死後の手続きを託す事ができた。

【考察】身寄りが無い患者は、病状の悪化や死について一人で向き合う事となり心的負担も大きい。A氏も体調の良い時はACPに取り組む事は難しかった。そのため、時期を見極めつつ体調や今後の見通しを考える事が出来るよう対話を重ねた。これにより、A氏自身が辛い現実と折り合いをつけながら、人生の終わりに向け自ら考え備える事に繋がったと考える。身寄りがいない患者が一人孤立する事なく主体的に意思決定が出来るよう、多職種で連携を図り、切れ目なく対応出来る環境や仕組みを早期から構築する事が必要と考える。

釧路赤十字病院 居宅介護支援事業所

居宅介護支援事業所における身寄りのない人への意思決定支援の実践

～ACP第二段階を多職種で支えるケアマネジャーの役割～

相澤 翔(ケアマネジャー)

キーワード：身寄りのない高齢者、意思決定支援、ACP第二段階、居宅介護支援、多職種連携

少子高齢化と単身世帯の増加に伴い、頼れる身寄りのない高齢者への支援は地域包括ケアの現場において喫緊の課題となっている。本人の意思決定能力が低下した局面では、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)の第二段階として、本人の価値観や生き方に基づく意思をいかに医療・ケアの方針決定に反映させるかが問われる。

居宅介護支援事業所のケアマネジャーは、在宅生活を継続する利用者と最も長期的・継続的に関わる専門職として、本人の日常の言葉や生活の様子からその価値観・意向を積み重ねてきた立場にある。しかし、急変時や入院時において、その情報が医療職に十分に伝わらず、本人不在の意思決定が行われるケースは少なくない。

本発表では、意思表示が困難な状況に至った「身寄りのない高齢者」を対象とした具体的な実践事例を提示する。平時からの継続的な対話の記録化と多職種・多機関への情報共有、医療機関・行政・地域との連携プロセス、倫理的課題への対応を通じて、ケアマネジャーとして「本人にとっての最善」を追求した取り組みを報告する。複雑化する社会課題の中で、地域を基盤とする居宅介護支援の専門性が果たす役割について、参加者とともに考察したい。

企画・セッション その他企画・各種会議 3

10月22日(木) 10:00～12:00 第13会場(福岡国際会議場 2F 201)

退院後を見据えた病院薬剤師の新たな業務展開 ～病棟薬剤業務実施加算の引き上げが示唆する 病院薬剤師の未来像～

企画・セッション
その他企画・各種会議

令和8年度の診療報酬改定において、病棟薬剤業務実施加算1は120点から300点へと大きく引き上げられた。これは、病院薬剤師に対する国民や他職種からの期待が高まっていることを示唆している。しかしながら、これを算定するためには、薬剤総合評価調整加算の算定回数が直近3ヶ月で10回以上であること、かつ直近3ヶ月における退院患者に対する退院時薬剤情報管理指導料の算定割合が4割以上であることが要件となっている。つまり、これは、病院薬剤師がポリファーマシー対策を十分に行い、入院中に退院後を見据えた薬剤業務を積極的に取り組む必要があることを意味している。近年、慢性的な人員不足が問題となっている病院薬剤師が、これらを実現するためには、薬剤師のみならず他職種と綿密に連携し、相互に協力をしながら業務に当たることが肝要である。

本シンポジウムでは、この課題に対して精力的に取り組んでいる施設の業務を紹介し、多職種の視点で考察することにより、算定の促進に向けて議論を深めていきたいと考える。

座長

飯山赤十字病院	滝澤 康志 先生
秋田赤十字病院	田口 伸 先生

演者

医療事業推進本部	池谷 智貴 先生
日本赤十字社愛知医療センター	
名古屋第一病院	宮川 慶 先生
岡山赤十字病院	小池 彩子 先生
益田赤十字病院	郷原 学 先生
高知赤十字病院	上池 和子 先生

企画・セッション その他企画・各種会議 4

10月22日(木) 10:00～11:00 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)

リハビリテーションDXの実装戦略 ～成功事例から学ぶ現場定着と横展開～

座長 姫路赤十字病院 リハビリテーション科部技師長 皮居達彦
足利赤十字病院 第一急性期リハビリテーション課長 松川 勇

限られた人員でリハビリテーション部門の質と機能を維持・向上させるためには、医療DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進が不可欠である。一方、赤十字病院グループのリハビリテーション部門では、デジタル技術の導入・活用状況に施設間で差がみられるものの、先進施設では電子カルテのテンプレート化、AIの活用、音声入力システムの導入、RPAによる実績集計や文書作成の自動化などを積極的に導入し、業務効率化や働き方改革に成果を上げている。

本セッションでは、これらの実践事例をもとに、導入の経緯や運用上の工夫、現場への定着に向けた取り組み、課題とその解決策を紹介するとともに、各施設の実情に応じたDX推進の方策について理解を深める。さらに、参加者が自施設で実践できる具体的なヒントを持ち帰るとともに、赤十字病院グループ全体での知見共有と成功事例の横展開を促進し、リハビリテーションサービスの質向上につなげることを目指す。自施設で実践できる業務改善やDX推進のヒントを得たい皆様のご参加をお待ちしております。

●発表者

1. 赤十字グループ リハビリ部門におけるDXの現在地 ― 全国調査から見えた実態
姫路赤十字病院 リハビリテーション科部技師長 皮居達彦
2. 紙と手作業からの脱却作戦！～当院における医療DXへの挑戦～
旭川赤十字病院 第二理学療法課長 北山謙一郎
3. 医療DXの実装と現場定着への取り組み
日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 内部障害理学療法課長 永田英貴
4. 現場で使えるDXのすすめ ～スマホとAIで実現するリハビリ業務改革～
松山赤十字病院 理学療法第二課長 坪内健一
5. HOPE LifeMark-GRIDで整える急性期リハビリテーションの情報共有
～属人化から標準化へ～
姫路赤十字病院 リハビリテーション第二課長 西野陽子
6. フロアーディスカッション

●企画責任者：姫路赤十字病院 皮居達彦

●企画担当者：京都第二赤十字病院 草木喜尚

企画・セッション その他企画・各種会議 5

10月22日(木) 10:00～11:30 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)

日本赤十字社

診療放射線技師会・臨床検査技師会 合同シンポジウム

「見たい！聞きたい！！話したい!!! Part.2」

放科と検査における緊急情報伝達 (STAT画像・パニック値) － うまくいく理由とうまくいかない課題・問題点 －

企画・セッション
その他企画・各種会議

放射線科と検査部門における緊急情報伝達 (STAT画像・パニック値) は、施設ごとに運用方法が異なり、その実効性について関心が高いテーマです。実際の運用において、緊急情報が医師へリアルタイムに伝達されているか、多職種間で円滑な情報連携が図られているかについては、各施設・各職種でさまざまな課題が存在します。

本シンポジウムでは、それぞれの施設や職種における現状や問題点を共有し、より効果的な緊急情報伝達のあり方について議論します。緊急情報伝達という共通課題を通じて、メディカルスタッフ相互の理解を深め、臨床により貢献できる体制づくりを目指します。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

【座長】 日本赤十字社診療放射線技師会 会長 荒井 一正
日本赤十字社臨床検査技師会 会長 青木 晋爾

【シンポジスト】

- 大規模施設(名古屋第二病院)におけるSTAT画像所見報告
～ Quality Indicatorによる報告数アップを目指して～
日本赤十字社 愛知医療センター 名古屋第二病院 医療技術部 放射線科 大保勇
- 小規模施設(小川赤十字病院)におけるSTAT画像所見報告
～ 高齢化・医療過疎地域施設の取り組み～
小川赤十字病院 放射線科部 田中達也
- 一般撮影領域におけるSTAT画像所見報告+α
～ 一般撮影領域におけるシステム構築～
姫路赤十字病院 放射線技術部 辻井貴雄
- 旭川赤十字病院におけるパニック値の運用について
～ パニック値発生時の連絡フローと対応基準の再評価～
旭川赤十字病院 医療技術部検査 木下陽介
- 姫路赤十字病院における生理機能検査パニック値の運用
～ 報告の標準化・カルテ確認・症例を通じた教育～
姫路赤十字病院 検査技術部生体検査課 住ノ江功夫
- パニック値運用の現在地とその先
～ 日赤中部ブロックの議論と検討過程から見る運用の方向性～
金沢赤十字病院 検査部 中澤有希(中部ブロック代表)
- 総合討論

企画・セッション その他企画・各種会議 6

10月22日(木) 10:00～11:30 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)

主催 日本赤十字看護大学附属災害救護研究所 災害救援技術部門

九州発の医療・防災イノベーション ～日本における医療・防災課題の共通解～

(演者)

株式会社 Agoop 取締役会長、株式会社 SB TEMPUS 取締役 CTO 柴山 和久

豊田通商株式会社 テクノロジーX 事業推進部 ドローンソリューションG グループリーダー 石川 達也

清水建設株式会社 設計本部 プリンシパル 鳥山 亜紀

日立建機日本株式会社 事業本部事業統括部 事業戦略部 部長 及田 弘光

(座長)

日本赤十字看護大学附属災害救護研究所 津田 直人(日本赤十字社本社)

日本赤十字看護大学附属災害救護研究所 根本 昌宏(日本赤十字北海道看護大学)

(企画)

日本赤十字看護大学附属災害救護研究所 曾篠 恭裕(熊本赤十字病院)

日本は、人口減少、インフラ老朽化、医療資源の偏在、地域医療の持続可能性に加えて、頻発する災害という諸課題に直面している。

一方、九州では、行政、企業、学術機関、そして、赤十字との連携により、これらの社会課題を持続可能な形で解決しようとする、先端的な取り組みが進められている。

そこで、本セッションでは、(1) 熊本での豪雨災害対応における AI を用いた被災状況把握と医療 AI による診断支援、(2) 長崎県五島列島におけるドローンを用いた医療物流、(3) 熊本県人吉市における MCP (Medical Continuity Plan) 支援システムと水害タイムライン防災、そして、(4) 九州を舞台とした、日本赤十字社の国際医療救援資機材開発に端を発する、医療・防災分野における可搬式電源装置の活用という4つの事例を取り上げる。

これらの事例に共通するのは、平時の社会実装技術が結果として災害時の機能維持能力を内包する「デュアルユース型レジリエンス基盤」として機能している点である。

本セッションでは、災害対応を特別な緊急オペレーションとして切り出すのではなく、日常の社会インフラ設計の延長線上に再配置することで、持続可能な医療・防災システムの構築の可能性を議論する。

企画・セッション その他企画・各種会議 8

10月22日(木) 13:30～15:30 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)

外国人診療 いまやること、これからやること6

赤十字病院グループとして、外国人患者が安心して医療を受けることができる体制の整備及び病院職員が安心して医療を提供することができる体制の整備を目的として、今年度、「外国人患者対応検討部会」が医療事業推進本部に設置された。

部会は、主に次に掲げる事項について検討を行う。(1)赤十字病院グループにおける外国人患者対応に関する中長期的なビジョンに関すること、(2)赤十字病院グループ独自の認証制度に関すること、(3)外国人患者対応にかかる研修の実施に関すること、(4)外国人患者対応にかかる担当者の情報共有に関すること、(5)外国人患者対応にかかる諸課題に関すること、(6)その他

外国人診療の現況や本部会の在り方について、様々な外国人問題を抱える地域の代表から発表いただき討論を行う。

座 長：清水赤十字病院 藤城 貴教
 成田赤十字病院 浅香 朋美
 発表者：高山赤十字病院 竹中 勝信
 福岡赤十字病院 井上 重隆
 広島赤十字・原爆病院 岡野 博史
 栗山赤十字病院 古源 真
 京都第一赤十字病院 上門 充
 横浜市立みなと赤十字病院 谷 文恵
 日本赤十字社(本社) 鈴木 朋佳

企画・セッション その他企画・各種会議 9

10月22日(木) 13:30～15:30 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)

臨床工学シンポジウム I つながる安全対策 ～想定外の出来事共有シンポジウム Part 8～

座長：京都第一赤十字病院 臨床工学技術課 宮下 誠
熊本赤十字病院 臨床工学課 濱口 真和

過去7回の日本赤十字社医学会総会に続いて、今回も全国の赤十字病院内で発生した想定外の出来事共有を目的とした臨床工学シンポジウムを開催する。

全国の医療施設では日々、様々なインシデント・アクシデントが発生している。患者誤認、転倒・転落、与薬関連ミス、医療機器の操作・管理ミスなどの問題事例は、さまざまな形で繰り返し発生しているのが現実である。

今まで発生したことのあるインシデント・アクシデントに対しては、その事例を教訓とし、再び同じ事例が起これないようにルールとマニュアルの見直し、リスクの再周知と再教育を繰り返し行うことでリスクマネジメントを推進しているものと思われる。しかし、時として想定外のアクシデントに遭遇することがある。これらは全く無防備な状態で遭遇することになり、判断を誤ると重大なアクシデントにつながるリスクが極めて高い。

今回も我々は、今までの日本赤十字社臨床工学技士会の繋がりを活かして赤十字病院グループ内で発生した想定外のアクシデントを共有し、想定内として対応できるようにすることで赤十字病院グループ全体の医療安全に役立てたいと考える。

【演者】

熊谷 一治	石巻赤十字病院
岩本 澄也	芳賀赤十字病院
吉岡 淳	仙台赤十字病院
奥野 渉	伊勢赤十字病院
児玉 健太	秋田赤十字病院
貝沼 宏樹	旭川赤十字病院
鈴木智香子	小清水赤十字病院
多田 憲輔	徳島赤十字病院
鬼澤 桃子	横浜市立みなと赤十字病院
森 雄紀	静岡赤十字病院
阿部 豪介	大分赤十字病院
開 正宏	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院
森本 学	諏訪赤十字病院

企画・セッション その他企画・各種会議 10

10月22日(木) 13:30 ~ 15:30 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)

2026年 全国赤十字病院救急医療実務者会議

内容：全国の赤十字病院における救急医療に従事する実務者の会議

座長・司会：日本赤十字社医療センター

救命救急センター長 山下 智幸

企画・セッション
その他企画・各種会議

当会議は、2009年より開催されている救急医療に従事する赤十字病院職員による会議体であり、発足当時より赤十字病院における救急医療の充実推進に向けて議論をしてきた。

当会議の主体となる日本赤十字社救急医療協議会【医療登録第22号】は、2021年12月に「日本赤十字社医療施設職員によって構成される団体」の登録・承認を受けている。

2026年の診療報酬改定では、救命救急入院料の枠組みの変更や、病院機能に応じた入院基本料への変更、救急外来での医療提供に係る医学管理料の新設など、救急医療分野も大きな影響を受けていることは確かである。

今後、超高齢化社会の到来や社会構造の変化に適応し変革を続けなければならない救急医療分野について、赤十字病院としてどのような取り組みを進めるべきか、参加者と共に議論を深めたい。

議題)

1) 総会

- ・前会長の退職に伴う新会長の選出について
- ・当国会則の改定について

2) 医師部門

- ・専攻医制度と専攻医修了後について(専門医研修とキャリア形成)
- ・医師の働き方改革について(タスクシフティングも踏まえて) 等

3) 看護師部門

- ・特定行為看護師、診療看護師の救急医療現場での活動について 等

4) 救急救命士部門

- ・救急救命士が現場で従事する業務について(救急救命処置含む) 等

5) 医事部門

- ・2026年度の診療報酬改定による救急医療分野の対応について 等

6) 救急医療全般

- ・救命救急センター入院料の必要度に自傷行為を含める提言について
- ・救急医療を提供する上での懸案事項と解決策の検討について 等

7) その他

※状況により、議題が変更となる場合があります。

企画・セッション その他企画・各種会議 11

10月22日(木) 15:40～17:10 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)

日赤医療経営士会 参加型企画 「もしあなたが院長になったら？」 －その課題、多職種で解決します！－ Part 2」

日本の医療現場は慢性的な人手不足や医療費の高騰、超高齢社会による患者数の増加など様々な課題を抱えている。医療従事者がひとりでも多くの命を救うために昼夜を問わず努力する中で、多くの病院が厳しい経営環境に苦しんでいるのが実態である。

このような課題を解決する能力を有し、実践的な経営能力を備えた人材として医療経営士が近年増加しつつある。赤十字においては2022年度に日本赤十字社医療経営士会が発足し、全国の赤十字病院、施設の医療経営士もしくは医療経営に関心がある者が集まり、多職種で施設を超えた医療経営に関わる活動をオールジャパンで開始した。

各施設によって経営に関する課題は様々であるが、多施設・多職種の意見を聞くことで経営改善のヒントが得られると考える。日本赤十字社医学会総会において全国の医療経営士とともに、経営改善へ向けた取り組みについて一緒に考えていきたい。

本シンポジウムにおいては、各職種の立場での部門最適でなく、病院・地域という全体最適の視点による経営改善のアイデア・取り組みについてプレゼンした後、活発な議論を行う予定である。コンセプトは「一緒に学び、ディスカッションできるような場の提供」である。先着100名限定であるがオンラインを利用してリアルタイムに意見交換することで、発言しにくい人も参加しやすいよう工夫している。医療経営士や事務職だけでなく、医療経営に興味・関心がある方に多数ご参加いただきたい。

総合司会 石川 史明(日本赤十字社医療センター 栄養課)

■ 会長挨拶

佐藤 公治(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 院長)

■ 基調講演

本当に院長になってしまったら？－就任半年間のリアル－

奥本 克己(熊本赤十字病院 院長)

■ テーマ「もしあなたが院長になったら？－その課題、多職種で解決します！－」

演者 出雲 雄大(医師 日本赤十字社医療センター 副院長・経営企画戦略室)

演者 伴野 広幸(管理栄養士 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院 栄養課長)

演者 井上 一也(臨床工学技士 高松赤十字病院 臨床工学課長)

演者 河合 直之(診療放射線技師 高松赤十字病院 超音波診療センター課長)

演者 岸本 義幸(診療放射線技師 神戸赤十字病院 第一放射線課長)

ファシリテーター 佐藤 哲彦(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 病院総合支援部長)

ファシリテーター 小山 晃寛(熊本赤十字病院 人事課長)

■ 閉会挨拶

鈴木 由美子(北見赤十字病院 人事課長)

企画・セッション その他企画・各種会議 12

10月22日(木) 16:50～17:50 第13会場(福岡国際会議場 2F 201)

みんなで語ろう。未来の赤十字国際活動。

本シンポジウムでは、日赤における国際医療救援拠点病院の役割について、現場の実践を踏まえて再考する。近年、国際医療支援の重要性が高まる中、複数の日赤病院が海外派遣に関与してきた実績が蓄積されている。そのような背景のもと、福岡赤十字病院が新たに拠点病院として指定された。しかし、その具体的な機能や役割については必ずしも明確に示されておらず、現在もお模索が続いている。

実際の運用においては、他施設との役割分担、人材育成、情報共有の在り方など、整理すべき課題が存在している。特に日赤病院は、それぞれ異なる特性や強みを有しており、それらを活かしながら全体として機能する仕組みづくりが求められている。

本シンポジウムでは、「みんなで語ろう。未来の赤十字国際活動」というテーマのもと、拠点病院としての取り組みを経験する立場、実際に派遣に関わってきた現場の立場、さらに全体を俯瞰する立場など、多様な視点から話題提供を行う。

本シンポジウムは、完成されたモデルを提示する場ではなく、日赤の国際活動のこれからを参加者とともに考える対話の場と位置付ける。フロアからの意見も積極的に取り入れながら、それぞれの施設がどのように関わり、どのような役割を担い得るのかについて、現実的な視点から議論を深めることを目的とする。現場の経験や知見を持ち寄り、日赤における国際活動の今後の方向性をともに考える場としたい。

シンポジスト

永積健太郎(日本赤十字社 国際部 部長)

森 正尚(日本赤十字社 パートナースHIP推進部ボランティア活動推進室長)

杉本 憲治(日本赤十字愛知医療センター 名古屋第二病院 第三麻酔・集中治療部長 兼 国際救援部部長)

池田 範子(大阪赤十字病院 国際医療救援部 国際救援副部長)

川口真由美(福岡赤十字病院 看護係長 兼 国際医療救援部)

司会・進行

井上 重隆(福岡赤十字病院 第一消化器外科部長 兼 国際医療救援部部長)

橋本 香織(福岡赤十字病院 国際医療救援部 国際医療救援課長)

企画・セッション その他企画・各種会議 15

10月23日(金) 8:50 ~ 9:50 第15会場(福岡サンパレス 2F パレスルームA)

日赤医療経営士会 将来構想会議

医療経営の理論と実践を兼ね備えた資格として医療経営士があり、各医療機関・各職種が経営人材として活躍している事例も増えてきた。日本赤十字社の各医療施設においても医療経営士は在籍しているが、そのネットワークはまだ希薄であった。

日赤医療経営士会を立ち上げ、その会員数は100名を超えた。事務職員が多数を占め、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、管理栄養士等、様々な職種が在籍していることが強みである。医療経営士だけでなく、病院経営管理士、MBAの取得者もいる。事務職員も医療DXや施設管理等の様々な専門分野があるため、実務面での情報共有をすることで幅広い知識や技術による多角的な視点を身につけることができる。

活動の3本柱として「インプット」「アウトプット」「キャリア支援」を掲げ、これらを通じて人材育成を行っている。また主体的かつ機動的に活動できるよう「学術」「教育」「広報」「交流」の4つの部会を組織化した。

本会議においては、経営人材の育成に関する課題や、活動の活性化させるためにできること等について自由に活発な議論を行う予定である。

医療経営士や事務職だけでなく、医療経営に興味・関心がある方に多数ご参加いただきたい。

総合司会 畠山 桂吾(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 栄養課)

■ 会長挨拶

佐藤 公治(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 院長)

■ 議題提供1「特定行為研修修了看護師の配置要件に関連した情報提供」

演者 水谷 早希(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 麻酔・集中治療部)

■ 議題提供2「急性期拠点病院を目指す中での、診療報酬改定対応とデータ管理体制の構築」

演者 本多 登(洛和会ヘルスケアシステム 本部運営管理部門統括室 兼 洛和会音羽病院 医療情報・がん登録統計課)

■ 閉会挨拶

演者 金子 瑛(福島赤十字病院 経営企画課)

企画・セッション その他企画・各種会議 16

10月23日(金) 8:50 ~ 10:50 第16会場(福岡サンパレス 2F パレスルームB)

赤十字中小病院長会企画 中小規模医療施設の持続可能性を考える —経営・人材・質向上への挑戦

概要：国全体で少子高齢化が進む中、地域の中小規模病院においては人口減少が経営に与える影響を特に大きく受け、診療報酬改定の恩恵は少ない。なにより医師をはじめとした医療人材の確保ですら困難な状況が続き、医療DXをはじめ業務効率化への改革が急務である。シンポジウムにおいては、地域医療そして地域包括システムの中核施設を運営する病院長と事務管理者に登壇いただき、地域の特性に則した医療提供体制や経営の工夫を論じていただく。またわれわれ赤十字病院グループのスケールメリットが生かされるような施設間連携のあり方や今後の中小病院経営の在り方を探っていききたい。

総合討論における主な討議事項：

- A. 経営課題
 - 1. どの病床機能を選択するか：急性期/回復期/慢性期
 - 2. 地域包括医療/ケア病棟の考え方
 - 3. 地域医療連携推進法人制度のメリットとは
 - 4. 行政のサポート・補助金
- B. 人材確保・職員の高齢化対策
 - 1. 医師確保の工夫
 - 2. 総合診療医育成の進捗
 - 3. 看護師等の職員をどう確保するか
 - 4. DXとタスクシェア/シフトの進捗
- C. 建物老朽化対策と建て替え

企画・セッション その他企画・各種会議 17

10月23日(金) 10:15 ～ 11:15 第14会場(福岡国際会議場 2F 202)

臨床工学シンポジウムⅡ 『つながる臨床工学技士たち～交流型業務研修報告会～』

座長：日本赤十字社臨床工学技士会 教育研修支援委員会

諏訪赤十字病院 宮川 宜之
さいたま赤十字病院 齊藤 達也

近年、臨床工学技士を取り巻く医療環境は大きく変化しており、専門性の向上に加え、他施設・他分野との連携や情報共有の重要性が高まっている。本シンポジウムでは、「つながる臨床工学技士たち」をテーマに、交流を基盤とした業務研修の意義について報告する。

交流型研修は、施設や分野の異なる臨床工学技士同士が相互理解を深める機会となり、新たな視点や気づきを得る場として機能する。また、日常業務では得難い知見の共有を通じて、個々の技術力向上や業務改善への示唆が期待される。

本発表では、交流を通じて得られる効果や課題について整理し、臨床工学技士同士の継続的なネットワーク構築の重要性について考察する。さらに、今後の人材育成および医療の質向上に向けた交流型研修の可能性について展望する。

【目的】

研修参加者による学びや気づきの共有
他施設の業務や取り組みに対する理解の深化
今後の業務改善や連携強化のヒントの獲得
施設間ネットワークの形成とモチベーションの向上

【対象】

交流型業務研修参加施設

【演者】

梶野 公亨	那須赤十字病院
奥山 巧	飯山赤十字病院
田中 隼翔	北見赤十字病院
中條 聡	大阪赤十字病院
瀧本 さち	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院
増子 真人	旭川赤十字病院
吉崎 泰平	日本赤十字社和歌山医療センター
鎗木 聡	横浜市立みなと赤十字病院

企画・セッション その他企画・各種会議 18

10月23日(金) 10:30～12:00 第11会場(福岡国際会議場 4F 402+403)

医療現場でのAI活用～現在・未来～ 医療ITベンダーから見た全国赤十字病院での実装最前線

企画・セッション
その他企画・各種会議

【企画趣旨】

医療分野では、画像診断支援、電子カルテ、問診支援、文書作成支援など、さまざまな領域でAI活用が急速に進展している。一方で、開発側が期待する効果と、実際の医療現場での運用との間にはギャップも存在する。

本シンポジウムでは、赤十字病院で実際に導入・運用、また今後導入予定のAI関連システムについて、電子カルテベンダーや医療IT企業から事例を報告いただく。開発・提供側の視点から導入効果や課題を共有するとともに、医療現場との協働による実装の実際を議論し、今後の医療AI活用のあり方を展望する。

本企画は、AI技術そのものの紹介にとどまらず、実際に赤十字病院で運用されている事例を通して、導入効果と課題を現場目線で検証する点に特徴がある。医療機関とベンダー双方の視点を交えた議論により、今後の医療AI活用の実践的な方向性を示す機会となる。

【企画目的】

- ・赤十字病院におけるAI導入事例の共有
- ・医療現場とベンダー間の認識ギャップの可視化
- ・AI活用に伴う医療安全や責任のあり方の検討
- ・現場で真に活用されるAIの要件について議論する

【座長】

- ・北見赤十字病院 副院長 上林 実
- ・那須赤十字病院 医療情報管理課長 宮内 昭広

【登壇企業】

- ・富士フイルムメディカル株式会社
- ・株式会社リコー、リコージャパン株式会社
- ・日本アイ・ビー・エム株式会社

富士フィルムメディカル株式会社 営業本部内視鏡事業部内視鏡事業推進部販売促進 G

内視鏡 AI への取り組み

佐藤 大輔

(要旨) 富士フィルムは内視鏡分野において、AI技術^{*1}のDeep Learningを活用して開発された診断支援機能を「CAD EYE」として展開している。2020年11月に大腸ポリープの検出と鑑別を支援するソフトウェア「EW10-EC02」を、2022年11月に食道扁平上皮癌および胃腫瘍性病変の疑い領域を検出する「EW10-EG01」を発売し、その後もAI技術を活用した内視鏡に関連する製品を発売している。これらは日常臨床で役立つことを目指しており、内視鏡診療がより効率化されることを期待する。

※1 AI技術のひとつであるディープラーニングを設計に用いた。導入後に自動的にシステムの性能や精度が変化することはない。
(背景) 2023年に診断された約100万例のがんのうち、食道・胃・大腸で30%弱を占めている。5年生存率は、食道がんではStage Iが79.3%、Stage IIでは50.8%、胃がんではStage Iが93.1%、Stage IIでは68.2%である。さらに、消化器系の疾患では膵臓がんの予後が悪いとされており、いずれも早期発見が重要である。
また、大腸内視鏡検査では20%程度の腫瘍性病変の見逃しがあるとされる。大腸内視鏡検査の質の指標の1つとなるADR (Adenoma Detection Rate/腺腫発見率) は1%向上することにより大腸がんの発生率が3%、死亡率が5%減少すると報告されており、ADRを向上させるには6分以上の観察が必要とされている。本会では、上記のことからAI技術を活用した各種診断支援から業務効率化への寄与を目指したAI技術まで富士フィルムの内視鏡AIへの取り組みを紹介する。

1. 株式会社リコー 経営企画本部 AIサービス事業部 AIインテグレーション統括センター AIエージェント開発室 AIエージェント応用技術開発グループ
2. リコージャパン株式会社 デジタルサービス企画本部 ヘルスケア事業センター ヘルスケアソリューション技術室 技術グループ

オンプレミス型LLM導入事例と医療現場における実装課題の考察

ーリコージャパンの取り組みと那須赤十字病院での実践ー

村沢 義寛¹⁾、竹谷 開社²⁾

近年、医療分野におけるAI活用は急速に進展しており、特に大規模言語モデル(LLM)は文書作成支援や問診補助など、多様な業務の効率化に寄与することが期待されている。一方で、個人情報保護や可用性の観点から、医療機関におけるクラウド利用にはなお慎重な対応が求められており、オンプレミス環境でのAI活用ニーズが高まっている。

リコージャパンでは、ヘルスケア領域におけるICT基盤提供の経験をもとに、安全性と実用性を両立したAI活用に取り組んでいる。本演題では、当社の事業概要を紹介するとともに、那須赤十字病院におけるオンプレミス型LLM導入事例について報告する。具体的には、院内閉域環境でのLLM運用により、診療記録補助や文書作成業務の効率化を図った取り組み、その運用プロセス、効果、および導入時に顕在化した課題を整理する。

さらに、AIの有効性と医療現場における実運用との間に存在するギャップ、特に精度への期待、運用負荷、責任所在の明確化といった論点を可視化する。また、医療従事者との協働によるチューニングや運用設計の重要性について考察する。

本発表では、医療現場に根差したAI実装の要件を整理し、赤十字病院における持続可能かつ安全なAI活用の方向性について提言する。

[†] 日本アイ・ビー・エム株式会社、[‡] 北見赤十字病院

欠損値を含むバイタル時系列データから患者の緊急度を推定するAI手法の検証 ～北見赤十字病院における取り組み～

木村 大毅[†]、岩崎 圭弘[†]、田村 孝[†]、栗田 はな[†]、長島 淳[†]
齋藤 高彦[‡]、上林 実[‡]

【目的】

現在、北見赤十字病院ではNEWSスコアを活用して患者の緊急度合いを推定している。しかし実臨床では、①呼吸数等に欠損値が多く参考値に留まる点、②直近データのみで時系列的な変化を考慮できない点、③スコアが離散値である点が課題となっている。そこで本研究では、既存システムを代替せず、より高精度に緊急度を把握するため、最先端の時系列基盤モデルによる推定手法を提案する。

【手法】

提案手法では、自己教師あり学習を適用したIBMの時系列基盤モデルを活用した。ベンダー依存せず汎用導入できるよう、どの病院でも容易に取得可能な8種の標準的バイタルサインと年齢のみを入力とする。一部指標に欠損があっても過去の推移や他指標から特徴を自動補完するため、欠損の影響を受けずに緊急度を連続値で高精度に推定できる。

【結果】

約25,000名の検証データによる実験において、従来のNEWSスコアで「高リスク」と判定されず死亡した症例の81.2%に対し、提案手法は事前にアラートを発報できた。死亡症例への陽性率は92.0%の一方、悪化せず退院した患者への誤警報の割合(偽陽性率)は7.9%に留まり、アラート疲れの抑制と急変の見逃し低減の両立が示された。

【結論と展望】

データ欠損にロバストで連続変化を捉える基盤モデル技術により、既存アラートを効果的に補完できることが確認された。今後は実臨床におけるNEWSスコア運用のサポート効果の実証や、高い汎用性を活かした他院データでの検証を進め、全国の医療機関へ導入可能な次世代の緊急度判定インフラへの発展を目指す。

企画・セッション その他企画・各種会議 19

10月23日(金) 13:30～14:40 第10会場(福岡国際会議場 4F 401)

国際人道法普及ツール レイドクロスの基礎を学ぼう

趣旨・内容

近年、国際紛争や人道危機が多発する中で、国際人道法の重要性が改めて注目されている。日本赤十字社においても、各支部を中心にその普及活動が展開されている。

レイドクロスは、参加型アクティビティを通じて国際人道法の基本的概念を体験的に理解することを目的とした教育ツールである。本セッションでは、レイドクロスの基礎を学ぶとともに、普及活動への活用方法を共有し、地域社会における国際人道法の理解促進に資することを目指す。

【日時】 2026年10月23日(金) 13:30～14:40(受付開始:13:20～)

【場所】 日赤医学会会場

【内容】 戦時の決まりごとであるIHLを学ぶ体験型ツールである「レイドクロス(RAID CROSS)」を通じ、「対話」と「体験」を通して理解を深める。

企画主催者情報

主催者 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院・国際医療救援部

